

人文学部卒業研究

ディズニーアニメにおける

題 目

ヴィランの変化

指導教授

小川 順子

印

提出年月日

2018年 12月 17日

学籍番号

HI14027

氏 名

齋木 さやか

お願い

本卒業研究は、著作権の関係上、指導教員または執筆者本人の許可を得たうえでの閲覧のみを許可し、複写およびPDF等によるデータの受け渡し等は、一切禁止する。

万が一、禁止が破られトラブルが発生した場合、本卒業研究の関係者は一切の責任を負わない。

何卒ご了承ください。

ディズニーアニメにおけるヴィランの変化

Hi14027 齋木さやか

要旨

本研究の目的は、ディズニーのプリンセス映画に登場するヒロインが、時代とともに変化したように、ヴィランも変化していることを、ストーリーと色彩の変化を分析していくなかで明らかにすることである。ディズニーのプリンセス映画について、これまでに原作童話をどのようにディズニーが作り替えたのかという研究と、プリンセスの変化について女性史に着目した研究がされている。しかし、ヴィランの変化については言及されていない。そこで、本研究ではヴィランの変化に着目して分析と考察を試みた。

本研究の構成は次の通りである。序論で本研究での分析対象作品を明示し、登場するヴィランの「色彩の変化」と「作中の行動の変化」についての2点に着目し分析を行うことについて提示する。第1章では、1901年から1961年までにウォルト・ディズニーが手掛けたプリンセス映画のヴィランについて、ディズニーとアメリカの歴史を踏まえたうえで、分析と考察を行った。その結果、1901年から1961年のヴィランは子供向けに作られているということもあり、明らかに最初からヴィランとわかる見た目でキャラクターが作られており、作中での行動も一貫して悪そのものである。第2章では、ウォルト・ディズニーが亡くなった後の、1981年から2009年にウェルズとアイズナーが制作した作品のヴィランについて、第1章のヴィランと比較してどのように変化したのかについて、分析と考察を行う。その結果、第1章のヴィランより色彩に多様性があり、作中での行動に悪としての動きだけでなくキャラクターとしての魅力があるものに変化したことがわかった。第3章では、ジョン・ラセターが手掛けた2010年から2016年の3DCGで制作されたプリンセス映画について、第1章と第2章で分析したヴィランと比較し、どのように変化したのかについて分析と考察を行う。その結果、第1章や第2章でのヴィランと違い、見た目からヴィランだとわからないキャラクターが登場するようになった。また、倒すべき敵としてのヴィランではなく、主人公の成長の過程での障害として描かれていることがわかった。

結論として、ディズニーのプリンセス映画に登場するヴィランは時代とともに変化している。色彩は、時代を追うごとにより豊かなものに変化している。作中での行動も悪そのものとしての行動から、自信の目的をもったキャラクターとして魅力ある行動に変化し、近年では主人公が成長するための障害としての面が大きいといえる。これは、ディズニーの会社としての成長や代表者の方針も大きく関わっている。また、少なからず映画が公開された当時のアメリカ社会の不安がヴィランに投影されていると考えられる。

キーワード

ディズニー プリンセス映画 ヴィラン アメリカ社会 ストーリー分析

目次

序章.....	1
第1章 ウォルト・ディズニーが生きた時代.....	7
1節 『白雪姫』(1937)	9
2節 『シンデレラ』(1950)	11
3節 『眠れる森の美女』(1959)	14
4節 ウォルト・ディズニーが生きた時代のヴィラン	16
2章 ウェルズとアイズナーの時代.....	17
1節 『リトル・マーメイド』(1989)	19
2節 『美女と野獣』(1991)	22
3節 『アラジン』(1992)	24
4節 『プリンセスと魔法のキス』(2009)	26
5節 1989–2009年のヴィラン	28
3章 ジョン・ラセターの時代.....	29
1節 『塔の上のラプンツェル』(2010)	30
2節 『アナと雪の女王』(2013)	32
3節 『モアナと伝説の海』(2017)	33
4節 2010–2016年のヴィラン	35
結論.....	36
参考文献.....	37